反転語「離脱・脱離」における通時的変化

Diachronic Changes on Japanese Reversible Compound of Characters "Ridatsu and Datsuri"

鄭　悦
ZHENG, Yue

摘要

"Ridatsu" and "Datsuri" are reversible compound of characters. During 1912~1942, "Ridatsu" and "Datsuri" were almost synonymous, but in many cases, "Ridatsu" was used to mean <leaving from an organization> and <leaving from certain situation>. With the appearance of compound words "N + Ridatsu", the range of use has expanded and "Ridatsu" became the predominant word form. On the other hand, "Datsuri" tended to be used to mean <a part of the object comes off>. And the number of "Datsuri" gradually decreased during 1912~1942, but it did not disappear. Nowadays, it is used as a physical and chemical term. This differentiation of usage is a factor in the reversal of "Ridatsu" and "Datsuri". And phoneme and factors such as seeking novelty can also be included.

キーワード：*反転語　データベース　通時的変化　日中語彙交流*

Keywords: reversible compound of characters, database, diachronic changes, Sino-Japanese words exchange

1. はじめに

日本語には「習慣・慣習」「継承・承継」など字順が逆になる二字漢語が存在している。ここで、1組の二字漢語「離脱・脱離」を以下のように例を挙げて具体的に見る。

(1) 一昨年の秋、英国が金本位制を**離脱**してからは、各国の貨幣価格の上に起った激動が国際貿易に著しい渦紋を投げた。　『大阪毎日新聞』1933

(2) わが国は現在金本位制を**脱離**しているにもかかわらず、平価切下断行などという無茶な議論は慎しまなければ　『中外商業新報』1932

(3) 投手の生きた球を打ったのは、右わき腹痛で戦線を**離脱**した昨年８月末以来。　『産経新聞』2001

(4) ノーベル賞を受賞した田中耕一さんの「**脱離**イオン化法」の発見も、実験をしている時の

失敗がきっかけとなった偶然の産物だった。　　茂木健一郎『脳と創造性』2005

上記から分かるように、近代日本語と現代日本語[1]では、「離脱」「脱離」両方が使用されている。字順が反転しているが、近代には(1)と(2)のような同じ意味用法＜ある制度から離れる＞が観察され、両者が置き換えられると言える。しかし現代になり、「離脱」「脱離」は異なる意味用法に分化している。「離脱」では、(3)のように＜ある場所から離れる＞ことを意味する用法が多く見られる。一方「脱離」は(4)「脱離イオン化法」などの物理・化学用語名で使用されている。

そこで、本稿では「離脱・脱離」を取り上げ、一次資料と用例分析を通じ、両語の消長や意味変化を通時的に考察することで、反転の要因を追求することを目的とする。

2. 反転語

2.1. 反転現象

本稿で注目する反転語は広く反転現象の一つと位置付けることができる。言語には一般に、語順、語構成、音の並びといった様々な側面での反転が見られる。本稿ではこれを「反転現象」と呼ぶ。

日本語における反転現象は「離脱・脱離」「習慣・慣習」などの二字漢語にとどまらず、「古今東西・東西古今」「無味乾燥・乾燥無味」などの四字熟語や、「左右・みぎひだり」「東西・にしひがし」「風雨・あめかぜ」のような二字漢語と和語が成り立った対の語形にも見られる。また鈴木（1986）では、和語や混種語にも「売り掛け・掛け売り」「乗り降り・降り乗り」「消しゴム・ゴム消し」などの語順の入れ換わるものがあると記述している。

こうした反転現象は言語内だけではなく、通言語的にも見られる。「売買」―＜买卖＞[2]、「苦労（日)」―「노고（労苦・韓)」、「良妻賢母」―＜贤妻良母＞―「현모양처（賢母良妻・韓)」のように、特に同じ漢字圏にある日本語・中国語・韓国語に広く見られる。また、影山(1988:58)によると、日本語と英語の直示の表現も体系的に逆転語順を示している。例えば、「あれこれ」―“this and that”、「あちこち」―“here and there”「行き来」―“come and go”などである。

次に、反転現象の周辺にも触れておこう。米川（2009）に取り上げられた「あいつき（つきあい)」、「ネタ（種)」、「れつ（連れ)」などの一語にも見られる。こうした一語の中に行われる恣意的な置き換えは、集団の中だけに通じ合うことを目的とする集団語や隠語の造語法の一つとされる。また、音韻的な反転現象として字順が転換する「サザンカ（サンザカ)」、「ふんいき（ふいんき)」も挙げられる。

2.2. 反転語の定義

特に日本語の二字漢語における字順の反転現象について、田島（1985）は「字順の相反する二字漢語」、猿田（2002）は「反転語」、間淵（2018）は「字順転倒漢語」などとされ、名称は諸家によって一致していない。本稿では「反転語」と呼ぶことにし、猿田（2000）と間淵（2018）を参照しながら以下のように語形、音声の 2 つの方面から定義する。

a. 二字漢語 AB の A と B の順序が逆になっている対の語。例えば、「継承・承継」、「路線・線路」などである。但し、訓読みの和語は漢語と対応できないため、対象外とする（例えば、「品物（しなもの）」と「物品（ぶっぴん）」）。

b. AB・BA の漢字音の読みが変わらないもののみ、反転が認められる。「規定(きてい)」と「定規(じょうぎ)」の読みが異なるので、対象外とする。ただし、「狂熱(きょうねつ)」と「熱狂(ねっきょう)」のような変音現象が起こったものは認められる。

なお、反転語の意味関係に関して、同一の意味を表すものもあれば、違う意味を表すものもある。例えば「運搬・搬運」はいずれも「はこぶ」の意味を表しているが、「階段・段階」の場合には言えない。「階段」は「はしご」の意味で使用され、「段階」は「物事が進展していく過程の一区切り」を意味し、互いに異義関係にたつ。したがって、本稿では、意味関係からの定義をせず、上記 2 つの定義 a、b にあてはまる語を広く反転語とみなす。

3. 先行研究

3.1. 反転語全般について

反転語全般に関する従来の研究には、松井（1981）、竹中（1988）と鈴木（1986）などが挙げられる。

松井（1981）、竹中（1988）は日中反転語に注目し、収集された反転語を日中対応関係と初出の前後により、新造漢語か旧漢語で分類し考察したところ、異なる訳者の用語に対する偏向と近代に現れる両語形の統一が徹底していないなどの要因を指摘している。

鈴木（1986）は反転語の語構成に注目し、同義的・類義的な結合（「移転・転移」）、対義的な結合（「愛憎・憎愛」）、客体・補足関係的な結合（「痛心・心痛」）と修飾・主述関係的な結合（「別格・格別」）の 4 つに分類し、同義・類義や対義的のような並列関係にたつ反転語は非常に多いと指摘している。また、客体や修飾のような漢語式語構成は、補足や主述のような日本式の文法的結び付きになり、結局反転語形になったとされている。

3.2. 日中個別反転語について

上述の反転語全般を扱った研究は、反転語を量的に考察した上で反転の要因を整理する点では意義がある。しかし、鈴木（1986）では、漢語流行の実態を明らかにするとともに漢語語形

が淘汰され安定へ向かう経緯の究明が急がれる課題であり、各語の語史をたどる点ではさらなる研究の余地があるとされる。したがって、反転語の形成経緯を究明することを目的とする個別語の研究を以下で取り上げる。

齋藤（1977）は「社会・会社」の意味を観察することで、反転語の形成経緯を辿っている。現代語では違う意味で使用される「社会・会社」は、現在では片方は人々の集団全体を表すsocietyの意味であり、片方は営利を目的とした集団companyの意味を表しているが、本来両方とも古代中国語の「社」に由来し、いずれも「人々の集団」という意味が原点であったとされる。

一方、荒川（2000）と屠（2016）では、一次資料をもって形成経緯を考察している。荒川（2000）は近代の各種辞典に基づき、「健康」は、元々漢籍にあった「康健」の字順をひっくり返してつくられたと述べ、「健康」は中国語の声調法則に反しているため、和製漢語ではないかと推測している。また、屠（2016）では、中国の白話小説によって日本に伝播した「搬運」は次第に使われなくなり、それを逆転させた「運搬」が日本語において新たにでき、『哲学字彙』をはじめとする対訳辞書や啓蒙書で使用されたため次第に定着されていると指摘している。また、反転の内的要因としては、「搬」は「運」と同じ訓の表記「はこぶ」として活用されているので、より一般的に使用される「運」は前項に立ち、「運」「搬」の順番に並べることはより容易であると述べている。

本稿では、上記の研究手法を参考し、一次資料の考察を進めながら、データベースを用いて意味用法を通時的に考察した上、反転の経緯や要因を明らかにする。

4. 近代以前の「離脱・脱離」

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』で調べると、「離脱」「脱離」とも、用例の初出は近代である。同コーパスにおいて、「離脱」は8例のみで『東洋学芸雑誌』の1882年が最も早い。「脱離」も6例のみで、雑誌『太陽』の1895年が最も早い。両語ともコーパスにおいて近代以前に出現しないこと、及び近代以降の例も僅少である(3)ことからみて、日本では近代以降に一般化したと考えられる。ただ、他の資料を調べると、以下のように、近代以前の用例は皆無ではない。

『漢語大詞典』（羅竹風編）と『大漢和辞典』（諸橋轍次著）には中国語としての＜脱離＞が記載され、古典の用例も掲げられている。

脱離了酒色財氣，人我是非，倒大來好幽哉快活也啊！

（馬致遠『任風子』第三折　元（1250～1321年））

脱㆑離還㆑家、見㆑母再拜號泣。（『孝子傳』）

『孝子傳』の成立年は明確ではないが、おおよそ唐のころ（618～907 年）から日本に伝わったとされている[(4)]。また、「扈从圣明，**脱離**禍乱，青史傳之，古今詠嘆」（『隋唐五代墓匯編』）、「升堂曰，**脱离**世縁，乃在今日」（北宋『禅林僧宝傳』）などの用例から、中国語の＜脱離＞は唐から存在していたことがわかる。

日本語における「脱離」の最も早い用例は『日本書紀』[(5)]にあり、漢籍から引用したと考えられる。

皇孫於是**脱離**天磐座、排分天八重雲、稜威道別道別、而天降之也。

（巻第二　神代下　［第九段］）

また、東京大学史料編纂所の古代・中世を中心とする『古記録フルテキストデータベース』、中世を中心とする『古文書フルテキストデータベース』を調べると、中世の用例として各 1 例ずつ、僅かに次の 2 例がみつかる。いずれも仏教文脈である。用例の少なさからみて、当時の使用頻度は低かったと推定される。

苦海衆生依之**脱離**流転、諸人要見他師麼　（『鹿王院文書』1364 年）

奉主則外竭丹忠、去歳染疾、今冬告終、**脱離**煩悩羈鎖、超出生死羅篭

（『碧山日録』1468 年）

一方、中国語としての＜離脱＞は『漢語大詞典』と『大漢和辞典』には記載がない。他の資料に「解詩，如抱橋柱浴水一般，終是**離脱**不得鳥獣草木」（北宋『朱子語類』）、「且如趙象知机識務，**離脱**虎口，免遭毒手，可謂善悔過者也」（明『警世通言』）などの用例も僅かである。近代以前の中国語において、＜離脱＞はまだ普及していなかったと言えよう。

また、日本語における「離脱」の初出は、管見の限りでは、1245 年の『出雲鰐淵寺文書』に次の例がある。「脱離」と同じく仏教文脈であり、漢訳仏典から由来した可能性が考えられる。また、東京大学史料編纂所『古記録フルテキストデータベース』には例がなく、『古文書フルテキストデータベース』に 1 例みつかる。

易尽如廻岸之落船、三途**離脱**、似向風之紅葉、縦不能内発　（『出雲鰐淵寺文書』1245 年）

以上、「離脱・脱離」の初出と近代以前の使用状況を概観した。「脱離」は中国語から伝来した後、各種仏典で使用されていた。一方、「離脱」にも仏教文脈においての使用が見られるが、用例が少ないので、まだ普及していなかったと考えられる。だが、『日本語歴史コーパス』において近代以前の用例は出現せず、近代も用例の出現数が僅少であることから、近代以降に一般

化したものと推定される。

5. 各種辞典からみる「離脱・脱離」

5.1. 英華辞典

幕末から各種辞典が出版され、語彙交流に大きな影響を及ぼした。

まず、英華辞典を調べると、disencumber、disentangle の訳語に「離脱・脱離」が見つかった。表 1 からわかるように、ほぼ「脱離」が使用されているが、1847 年『英華字典』で「離脱」が初めて現れ、1872 年『英華萃林韻府』で「脱離」「離脱」の順で同時に現れている。これらの辞典での使用状況からみると、この時期の中国語においては「脱離」が優勢であるが、「離脱」も使用されている。

表 1　英華辞典における「離脱・脱離」

	英華韻府歴階 ウイリアムズ 1844	英華字典 メドハースト 1847	英華字典 ロプシャイト 1866	英華字彙 ウイリアムズ 1869	英華萃林韻府 ドーリットル 1872
disencumber			甪枷鎖,脱輕身, 解擔, **脱離身體**,移負, 脱難		
disentangle	解結;**脱離**	解脱,瓦解;解結;<u>離脱</u>	(disentanglement) 解亂者,甪難者,**脱離者**, 甪脱者	解結;**脱離**	解結,解脱,**脱離**, <u>離脱</u>

そして、1866 年のロプシャイト『英華字典』を原著とする和刻本『英華和訳字典』と、増補和訳が付された『訂増英華字典』では、次のように「脱離」しか使用されておらず、日本語への流入に影響を与えたと考えられる。

中村敬宇『英華和訳字典』　1879

disencumber　vt. to free from encumbrance,　甪枷鎖,脱輕身,解擔,**脱離**身體,移負,脱難　ミヲカロクサセル,ミヲカロメル,オモニヲオロサセル,ササハリヲナクサセル

disentanglement n.解亂者,甪難者,**脱離**者,甪脱者　トクコト,サバクコト,ホドクコト

井上哲次郎『訂増英華字典』　1884

disencumber　v.t.　甪枷鎖,脱輕身,解擔,**脱離**身體,移負,脱難

disentanglement　n.　**脱離**者,甪脱者

5.2. 英和辞典

次に、英和辞典も考察する。大正時代以前の英和辞典[6]を調べたところ、1889 年尺振八訳の『明治英和字典』の 1 カ所だけ記載があり、disencumber の訳語に「(他) 脱離スル (困難、障碍等ヨリ)」とある。大正以降の英和辞典では、次のように detachment、disembody、disengagement と disentanglement の訳語に「離脱・脱離」が使用されている。

表 2　大正以降の英和辞典における「離脱・脱離」

	井上英和大辞典 1919	新英和大辞典 1929	双解英和辞典 1943	新簡約英和辞典 1956	新英和中辞典 1967
detachment	①分離,脱離②差遣,排除,分遣③分遣隊,支隊,部隊④抜群,超俗,超脱	分離,脱離;分遣,派遣,差遣;《軍》分遣隊,枝隊;超越,超然		分離,脱離;超脱,(世俗の外に)超然としていること;分遣,派遣;分遣隊	分離,脱離
disembody			肉體から**離脱**させる	(霊魂などを)肉体から分離[**離脱**]させる	(disembodiment)《霊魂の》肉体**離脱**
disengagement		解放, 解脱, 脱離;《化》遊離		解放(する[される]こと);**離脱**,遊離	解放;**離脱**<from>;遊離;
disentanglement		ほどき,解くこと;解脱.脱離			解きほぐし;**離脱**<from>

表 2 からわかるように、1943 年『双解英和辞典』では、「離脱」は初めて disembody の訳語として用いられ、その後多用されている。一方、1919 年『井上英和大辞典』では、detachment の訳語に初めて「脱離」が使用され、その後「離脱」が他の訳語として多用されても、変わらず「脱離」であることは、両語の意味用法が異なることを示唆している。

以上、英和辞典における「離脱・脱離」を考察した。大正以降 (特に 1940 年代以降)、「離脱」が優勢になり、「脱離」が主に detachment の訳語として使用されている。

5.3. 国語辞書

最後に、日本の国語辞書の収録状況も確認する。

表 3 からわかるように、「脱離」が初めて収録されたのは 1898 年である。それに対し、「離脱」の立項は少々遅れ、1943 年からであり、前節の英和辞典の考察結果とほぼ一致する。したがって、「脱離」の立項はおよそ 1890 年代末から 1900 年代初頭であると考えられ、「離脱」の立項はおよそ 1940 年代頃からと考えられる。そして、両語が競合した結果、1960 年代頃から「離脱」が「脱離」に取って代わり、優勢が認められる。

表３　国語辞書から見る「離脱・脱離」の拮抗

年代（年）	辞書	脱離	離脱
1889-1891	言海	×	×
1892	日本大辞書	×	×
1896	日本大辭典	×	×
1897	日本新辞林	×	×
1898	日本大辞典ことばの泉	○	×
1907	辞林	○	×
1916	大日本国語辞典	○	×
1921	言泉	○	×
1932	大言海	○	×
1934	広辞林	○	×
1935	辞苑	○	×
1939-1941	大日本國語辭典　修訂版	○	×
1943	明解国語辞典	○	○
1952	辞海	○	○
1955	広辞苑	○	○
1957	言林	○	○
1958	広辞林	○	○
1963	岩波国語辞典	×	○
1974	新明解国語辞典	×	○
1982	三省堂国語辞典	×	○

6.　データベースによる調査結果

では、辞書以外での使用はどうだろうか。データベースを用いて、近代から現代にかけての「離脱・脱離」の使用状況や意味用法を具体的に考察する。

6.1. 調査方法

調査対象を日本語の「離脱」と「脱離」とする。

近代の用例収集[7]は、神戸大学経済経営研究所『新聞記事文庫』(以下「NCC」)[8]を対象として行った。NCC には 1910～1945 年の用例が収録され、年代推移が追える。なお、本稿では、一定の合計数が得られる 1912 年から、5 年ごとに用例数推移を考察した。なお、一般に、近代までの歴史的推移の調査には国立国語研究所『日本語歴史コーパス』が使用されるが、上述（第 4 節）のように、同コーパスで「離脱」「脱離」の例はそれぞれ 10 例以下と僅少であることから、異なるデータベースを用いて調査を試みた。

現代の用例収集は、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下「BCCWJ」）を用いて、対象を近代と同種のジャンル「出版・新聞」に限定し、1990 年から 2008 年までの用例数を調査した。

6.2. 近代から現代にかけての「離脱・脱離」の用例数推移

上記のデータベースから得られた「離脱」の用例は、NCC では 401 例、BCCWJ では 30 例である。「脱離」の用例は、NCC では 33 例、BCCWJ では 0 例[9]である。それぞれの用例数推移と割合推移は以下の通りである。

表４　データベースから見る「離脱・脱離」の用例数推移

時代	年代	「離脱」		「脱離」	
近代(NCC)	1912	9	75%	3	25%
	1917	24	71%	10	29%
	1922	39	87%	6	13%
	1927	20	91%	2	9%
	1932	169	96%	7	4%
	1937	58	92%	5	8%
	1942	82	100%	0	0%
現代(BCCWJ)	1990～2008	30	100%	0	0%

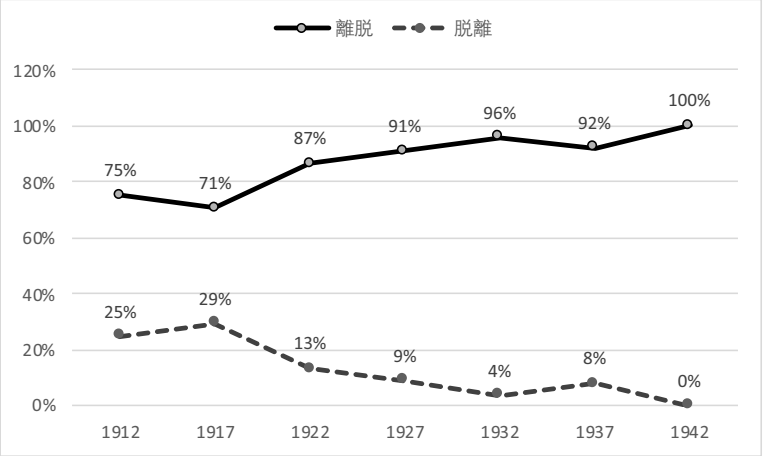

図１　近代「離脱・脱離」の割合の推移

図１からわかるように、1912～1942 年区間では「離脱」の割合は次第に増加し、それに伴い「脱離」の割合は次第に減少し、1942 年に見られなくなり、現代 BCCWJ でも 0 例である。また、1912 年時点で「離脱」はすでに優勢でなった。英和辞典や国語辞典での立項はおよそ 1940 年代頃からと考えられるが、実際の使用状況はそれより早いと言えよう。

以上、データベースによる用例数調査から、「離脱・脱離」の変化の傾向が観察された。さらなる具体的な変化経緯を明確にするために、次節から各年代における意味用法を分析する。

6.3.　「離脱」

6.3.1. 近代における「離脱」の意味用法

NCC を用いて得られた近代の 401 例の「離脱」から、以下 2 つの意味用法が観察できる。

意味用法 1　＜所属の団体・組織＞から離れる

(5) 伊太利をして三国同盟より離脱せしめんとするは其野心の一なり此機会を利用し北部の亜細亜其他に於ける露国の勢力範囲を限定し他国を排除　『大阪毎日新聞』1912.6.13

(6) 十年十数年の後には都市の経済組織から離脱した農村独自の経済機構が成立することを予想せしめるに至った。　『中外商業新報』1932.6.5

意味用法１は、＜所属の団体・組織、または地域や国＞から離れることを表す類である。(5)は「三国同盟から離れる」ことを意味し、(6)は、「農村独自の経済機構が都市の経済組織から離れる」ことを述べている。

意味用法２　＜ある状況・形式＞から離れる

(7) 此の如き喜ぶべき現像の到る所に現わるるの時、農村は初めて其苦境より離脱し、健全なる発達を遂ぐべしと信ず。　『大阪毎日新聞』1912.5.21

(8) 横暴なる旧軍閥の圧政と支那本部の無政府状態とより離脱せんことを期したり　『大阪朝日新聞』1932.11.21

(9) 金本位制を離脱した今日では、金の現送といえばとかく名誉ではないことのように考えられ易い　『大阪毎日新聞』1937.3.7

意味用法２は、＜（望ましくない）状況や状態＞、または＜制度や思想といった形式＞から離れることを意味する類である。(7)は、「農村は、苦境という望ましくない状況の中から離れる」ことを意味し、(8)は「無政府の状態から離れる」ことを意味する。また、(9)の「金本位制」とは一国の貨幣価値を金に裏付けられた形で金額を表し、商品の価格も金の価値を標準として表示される制度のことである。1930 年代にはイギリスを先頭に諸国が金本位制から離脱したという大事件があるゆえ、1932 年・1937 年・1942 年において、「金本位制を離脱する」が圧倒的に多い。例のほか、意味用法２のカラ・ヨリ・ヲ格名詞には「窮状、恐慌、難境、懸念、監督、統制、支配、政権、協定、契約」などがある。

6.3.2. 近代における複合語「N＋離脱」の多用

1912～1942 年区間では、以下のような複合語「N＋離脱」が多数見られる。

(10) ここに満州国におけるデフレーション離脱が喫緊な課題となり、幣制整理の段階から幣制改革への発展が任務となって現れた　『満州日日新聞』1937.4.12

(11) 日銀に限ると理解するよりも寧ろ特銀の国家機関化−特銀之企業性離脱が最はや次官の問題に過ぎない　『読売新聞』1942.5.5

なお、複合語「N＋離脱」の用例数と割合を以下の図２で示す。

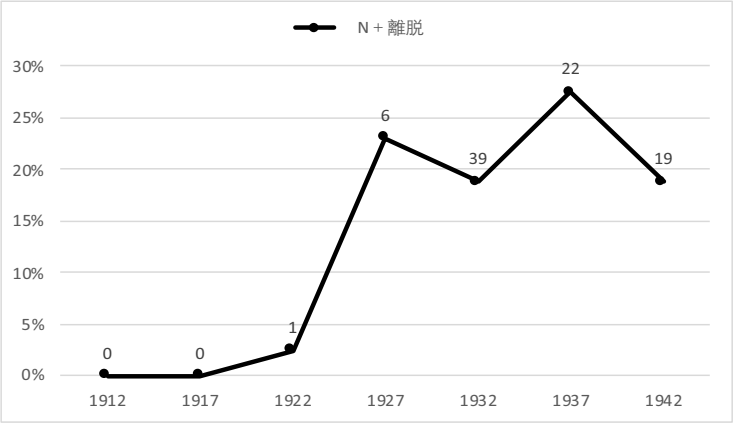

図２　近代における「N＋離脱」の用例推移

図 2 に見えるように、1912～1927 年において複合語「N＋離脱」の使用が次第に拡大し、1927～1942 年区間では増減しながら、ほぼ全体の 2 割を占めている。

6.3.3. 現代における「離脱」

BCCWJ「出版・新聞」を用いて得られた、現代（1990～2008 年）の 30 例の「離脱」からも、上記の意味用法 1（＜所属の団体・組織＞から離れる）と意味用法 2（＜ある状況・形式＞から離れる）が観察でき、近代から引き続いてきたと考えられる。

また、同区間では、複合語「N＋離脱」の多用も見られる。割合は近代より少々増加し、30 例の中に 11 例あり、全体の 36.7%を占めている。そのうち、「派閥離脱」「戦線離脱」「幽体離脱」「負傷離脱」などの複合語の慣用が固定する傾向が見られる。

(12) 参院選候補の派閥離脱問題について、山崎氏は十八日の記者会見で　『読売新聞』2001
(13) ついにワールドカップ（W杯）から戦線離脱。　『朝日新聞』2005

このように、複合語「N＋離脱」の多用と定着は、「離脱」の優勢につながるのみならず、漢語「離脱」が日本語の中になじんでいることも表していると考えられる。

6.4. 「脱離」

6.4.1. 近代における「脱離」の意味用法

NCC を用いて得られた近代の 33 例の「脱離」から以下 3 つの意味用法が観察できる。

意味用法 1　＜所属の団体・組織＞から離れる

(14) 従来の戸籍を脱離したる結果絶対に親族関係の止みたる場合を謂う者にして
『法律新聞』1917.1.13
(15) 往往にして我等が中華民国を脱離して独立国家を成立したと誤解している様であるがそれは全く見当違いの見解であって　『大阪朝日新聞』1937.5.13

意味用法 2　＜ある状況・形式＞から離れる

(16) 彼等は此上は最早平和の克復によりて刻下の苦脳より脱離するの外なしと信ずる
『中外商業新報』1917.8.13
(17) わが国は現在金本位制を脱離しているにもかかわらず、平価切下断行などという無茶な議論は慎しまなければ　『中外商業新報』1932.6.25

近代における「脱離」の意味用法 1 と意味用法 2 は前節の「離脱」にも見られ、両語形が併用される主なる意味領域である。しかし、同じ意味用法で使用されているが、「脱離」の方には 29%→13%→9%→4%→8%→0%（表 4 参照）の減少が見られ、1917 年～1942 年区間は「脱離」の淘

汰収束の過渡期であると推測される。

意味用法 3　＜具体物の一部分＞が脱ける

(18) 生糸に膠質少なきは其抱合を不良ならしめ強伸力を減少するものなるを以て繰綿法に改良を加え成るべく膠質の脱離を滅せしめんと企つる者あり　『中外商業新報』1912.5.6

(19) 殊に繭の表皮脱離せる所多きと泥土塵埃の附着せる為め色彩の美は殆んど消失し　『神戸又新日報』1912.6.8

「脱離」の意味用法 3 は、NCC から得られた 401 例の「離脱」には見られない用法である[(10)]。(18)では「生糸の膠質が脱けること」、(19)では「繭の表皮が脱けること」が述べられ、いずれも＜具体物の一部分＞が脱けることを意味する。

6.4.2.「脱離」の物理・化学用語化

BCCWJ「出版・新聞」により得られる現代の「脱離」は 0 例である。ジャンルを絞らず調べると、11 例が見つかる。そのうちの 8 例が用法 3（＜具体物の一部分＞が脱ける）にあたる。

(20) また、この最外殻電子は，容易に脱離し、原子は陽イオンになる。　西野純一『化学の扉』2000

(21) 長期保存や実験操作中に，ヘムが脱離した不活性型のＰ四百二十型の割合が増加することが知られているが　臼井健悟『ゲノムネットワーク』2005

(20)では「最外殻電子が脱ける」、(21)では「ヘムが脱ける」と述べられ、いずれも物理・化学文脈において＜具体物の一部分＞が脱けることを表している。また、他の用例として、「脱離反応」、「電磁加熱脱離」、「脱離イオン化法」などの物理・化学用語が見られ、意味用法 3 から派生したと推測される。

以上の考察から、現代における「脱離」は「離脱」と異なり、主に物理・化学文脈で見られ、物理・化学用語として使用されていることがわかる。「脱離」は 1917～1942 年において次第に使われなくなり、その時期が淘汰収束の過渡期であったと考えられる。だが、それを経て現代にも完全に消滅しなかったのは、日常語としての用法を失う一方で、物理・化学用語化したためと言えよう。

6.5. まとめ

以上の考察に基づいて、「離脱・脱離」の変化経緯をまとめる。

まず、日本語の「脱離」は中国語に由来し、中世にある各種仏典を通じて知られるようになったと推定される。のちに、字順が逆になった「離脱」が中国と日本でともに現れ、「脱離」と同じ意味を持ちながら競合している。辞典類では、1940 年代以前の英華・英和辞典には「脱離」

が優勢であるが、1940 年代以降「離脱」が立項され、次第に優勢になった。

しかし、辞典外の実際の使用実態から見ると、「離脱」が優勢になった時期はもっと早い。1912～1942 年区間においてはすでに優勢であり、＜所属の団体・組織＞と＜ある状況・形式＞から離れるという意味用法で多用されている。「N＋離脱」のような複合語も現れたことで、慣用的用法がうまれ、使用範囲が広がった。そして現代でも優勢が保たれ、複合語「N＋離脱」も広く見られる。

一方、元々優勢であった「脱離」は 1912～1942 年区間において用例数が劣勢で、「離脱」と競合した後の淘汰収束の過渡期にあると考えられる。しかし、近代から現代にかけての「脱離」は＜具体物の一部分＞が脱けるという、「離脱」にはない用法（意味用法 3）をもち、現代ではこの用法から派生した、物理・化学用語に特化した使用が見られる。こういった物理・化学用語化は、「脱離」が現代まで消滅に至らなかった理由と考えられる。

7. 反転の要因

反転語の反転する要因について、一般に音声的要因が広く言及されている。陳・于（1979）、荒川(2000)、中川(2000)などでは、中国語の声調と日本語の音節は語順と深く関与していると指摘している。中国語は声調順に並ぶのに対し、日本語は（短い音節＋長い音節）の順に並ぶ傾向があるとされている。「脱离」は 1 声＋2 声の順であり、「離脱」は（り＋だつ）の順に並んでいることから、音声の制約があると推測される。しかし、音声的要因のほか、以下の要因も考えられる。

7.1. 用法の分化

「離脱・脱離」の反転要因には、用法の分化があげられる。

間淵（2018）では、コーパスに基づいて量的に反転語の併存状態を考察したところ、同義関係にある反転語の併存が 40%見られると指摘し、「一方の用法が限定・固定化されており（連語、文法機能、特殊な意味・文脈等）、用法の分化が明らかなために併存しているものが多い」と述べている[11]。

「離脱・脱離」は間淵（2018）の論証と合致している。「離脱」は＜所属の団体・組織＞と＜ある状況・形式＞から離れるという意味用法で日常語として使用されているが、「脱離」は「脱離反応」といった物理・化学用語として使用されている。用法が分化することで、「離脱」と「脱離」両語形が併存し続けていると考えられる。

7.2. 新奇性

中川(2000)では、「反転」を「体感度を低める手段」として捉え、「すでに通用している並列

語を反転させる具体的動機としては、衒学興味、欧米の文献の翻訳などに際し目新しさを求めることが想定される」と述べている。

現代における「脱離」は主に物理・化学用語として使用され、翻訳要因が介在していると推測できる。5.2 では、1919 年から、「脱離」は detachment の訳語として使用され、「離脱」が多用されるようになってからも、訳語としては変わらず「脱離」であることをみた。そして現代でも「光電子脱離 photo detachment」「電子脱離 electron detachment」などの用語の訳語として「脱離」が用いられ、当時の英和辞典の影響が継続していると考えられる。但し、用語を翻訳する時に、優勢の「離脱」を、あえて「脱離」と反転させることにより、抽象的なものにしたのかについては、まだ検討の余地がある。

8. 今後の課題

本稿は「離脱・脱離」という 1 組の反転語に注目し、用例分析を通じ、近代から現代にかけての消長や「脱離」の物理・化学用語化を通時的に考察した。そして、反転の要因を、音声や用法分化、新奇性の追求などといった観点から考察した。

反転語の消長や用法変化、反転要因を考察するにあたり、今後さらに、中国語側での反転現象との関係を明らかにする必要があると考える。そのような観点で、ここでは、日本語を軸にし、中国語からの影響も視野に入れながら、これまでの各個別反転語の研究を形成経緯の視点でパターン化して整理する。

表 5　反転語（日本側）の変遷パターン

		パターン	用例
中国由来 AB	1	AB ⟶ AB　（無変化）	
	2	AB ⟶ AB・BA ⟶ AB	「治療・療治」（佐藤 1976）
	3	AB ⟶ AB・BA ⟶ BA	「康健・健康」（荒川 2000） 「搬運・運搬」（屠 2016）　**「脱離・離脱」**(12)
	4	AB ⟶ AB・BA	
日本由来 AB	5	AB ⟶ AB　（無変化）	
	6	AB ⟶ AB・BA ⟶ AB	「抵抗・抗抵」（鈴木 1981）「短縮・縮短」（屠 2016） 「素因・因素」（鄒 2016）
	7	AB ⟶ AB・BA ⟶ BA	
	8	AB ⟶ AB・BA	
※「治療・療治」のように、前者は AB、後者は BA ※両語形の BCCWJ における用例数が 15 以上のみ、併存と認め、AB・BA で表す			

表 5 で示したとおり、日本語側の反転語を形成経緯により、理論上 8 種類に分類できる。本稿が注目する「離脱・脱離」は、中国語由来 AB 型（「脱離」）が日本で AB・BA（「脱離・離脱」）

の併存を経て、最終的に BA（「離脱」）に定着するパターン３に属する。のちに現れた BA に定着するということは、中国由来 AB が日本語で何らかの言語制約により衰退したと考えられるので、パターン３に注目することで、日本語の言語制約や特徴が見えてくると考えられる。そこで、「中国由来 AB 型が日本で BA 型として定着する反転語の体系化」を今後の課題とし、本稿をその一環に位置づける。

注

⑴ 本稿でいう近代日本語は、明治時代から戦前まで（1868 年～1945 年）の日本語を指す。現代日本語は、戦後（1945 年）以降の日本語を指す。
⑵ ＜＞で中国語を示す。
⑶ 国立国語研究所『日本語歴史コーパス』において、反転語「継承」は 95 例、「承継」は 16 例、同じく「運搬」は 269 例、「搬運」は 2 例出現しており、「離脱・脱離」の合計出現数より圧倒的に多い。
⑷ 趙超（2004）「日本流伝的两种古代『孝子伝』」『中国典籍与文化』第 2 期，pp.4-10
⑸ 『新編日本古典文学全集　日本書紀』校注・訳：小島憲之/直木孝次郎/西宮一民/蔵中進/毛利正守
⑹ 『英和対訳袖珍辞書』(1868 年)、『附音挿図英和字彙』(1873 年)、『附音挿図英和字彙　再版』(1882 年)、『英和雙解字典』(1886 年)、『附音挿図和譯英字彙』(1888 年)、『和譯字彙：ウェブスター氏新刊大辭書』(1888 年)を用いて、detach, disembody, disencumber, disengage, disentangle, secede, separate を調べたところ、「離脱・脱離」は見当たらなかった。
⑺ 明治に入ってもコーパス上で得られる用例は多くない。国立国語研究所『歴史コーパス』中の用例数は「離脱」8 件、「脱離」6 件、1 桁ずつしかない。他のデータベースを調べたところ、神戸大学経済経営研究所『新聞記事文庫』が最も調査にふさわしいと判断した（「離脱」2616 件、「脱離」159 件）。
⑻ 『新聞記事文庫』は神戸大学経済経営研究所によって作成された明治末から昭和 45 年までの新聞切抜資料である。記事数は約 50 万件。また、その収録範囲も経営・経済を主体としながら、社会・政治外交・法制・教育などにいたるまで非常に広範にわたる。採録対象紙は非常に広範で、東京・大阪・愛知・福岡などの主要地方紙や、「台湾日日」「満州日日」等の旧植民地・外地紙などが幅広く採録されている。
⑼ BCCWJ「出版・雑誌」のカテゴリーを加えても、「離脱」は 51 例、「脱離」は 0 例。
⑽ NCC から得られた「離脱」の 401 例は、1912～1942 年区間における 5 年刻みで収集された用例である。実際には、他の年代に次のような用法 3 が観察されるが、極めて稀な用法といえよう。
＊日本のエナメルは粗製にして離脱し易きのみならず常に品物払底の故を以て註文の品数を送附せず対外信用を失墜しつつある　『神戸新聞』1919.10.1
⑾ 間淵(2018:460)は「便利・利便」を取り上げた。現代では「便利」がほぼ形容詞用法に固定化され、「利便」は「利便性」の形に固定化して用いられていると指摘した。
⑿ BCCWJ における「脱離」の用例は 11 例しかないので、最終に BA（「離脱」）だけが残るパターン 3 に分類した。

参考文献

荒川清秀（2000）「『健康』の語源をめぐって」『文学・語学』166，pp.72-82

影山太郎（1981）「日英語の鏡像関係」『言語(10)』10-12，pp.54-61

米川明彦（2009）『集団語の研究』東京堂

齋藤毅（1977）「社会という語の成立」『明治のことばー東から西への架け橋』，pp.175-228,講談社

佐藤亨（1976）「近世の漢語についての一考察―『治療』と『療治』をめぐって」『国語学』106，pp.1-13

猿田知之（2002）「列島漢語の字順定着について--反転語を中心として」『茨城キリスト教大学紀要Ⅰ人文科学』36，pp.142-132

鈴木丹士郎（1981）「『抵抗』と『抗抵』」『国語語彙史の研究 2』和泉書院

――――――（1986）「二字漢語の字順についての問題」『国語論究 1 語彙の研究』，pp.278-300，明治書院

田島優（1985）「字順の相反する二字漢語」『名古屋大学人文科学研究』14，pp.1-18

竹中憲一（1988）「中国語と日本語における字順の逆転現象」『日本語学』7-10，pp.56-64

陳愛文・于平（1979）「並列式双音式的字序」『中国語文』2 期，pp.101-105

屠潔群（2016）「日中同素異順語『短縮―縮短』の形成について」『アクセント史資料研究会論集』11，pp.121-134

中川正之（2000）「鏡像語を作る 2,3 の要因」『佐治圭三教授古稀記念論文集　日本と中国―ことばの梯』，pp.287-295,くろしお出版

永嶋大典（1996）『蘭和・英和辞書発達史』,ゆまに書房

松井利彦（1981）「『簡単』『明確』の周辺」『国語国文』50-5，pp.39-55

間淵洋子（2018）「コーパスに基づく字順転倒漢語の網羅的把握の試み」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』3，pp.452-462

宮田和子（2010）『英華辞典の総合的研究：19 世紀を中心として』,白帝社

用例出典

神戸大学経済経営研究所『新聞記事文庫』http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 https://chunagon.ninjal.ac.jp

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search

東京大学史料編纂所データベース https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller

最終閲覧 2021 年 12 月 17 日